

# Eureka X

六年制通信 No.8 令和4年5月26日(木)号

## 一つ実例を…

私はよく物語の海という話をします。これまで数えきれないほどの物語を私たちの先祖は生み出してきました。文字のなかった時代に話し言葉で伝承されてきた物語もやがて文字が発明されると、粘土板なり羊皮紙なりに書き残され、私たちの財産となりました。そうやって蓄えられてきた膨大な物語群を物語の海と言っているのです。その海に注ぎ込む河は大小無数にあることでしょう。どの河口からでもいいから物語の海へ漕ぎ出しなさいと、そんな話をよくしますね。また、物語の海の中には地域も時代も違う、従って話す言葉も異なる民族の中に同じ物語が生まれている、そんな不思議が多くある、そんな話もしますが、一つ実例を紹介します。

国文社の叢書アレクサンドリア図書館に『フィロゲロス…ギリシア笑話集』(中務哲郎訳)という本があるのですが、この p.25 に「井戸に落ちた毬」という話があります。この訳者は博覧強記で有名な方で、しかもときどき大阪弁で訳されたりして読んでいて面白いですよ。お話はこうです。

うつけ者の息子が毬遊びをする。毬が井戸にはまったので覗きこみ、自分の影を見て、毬を返せと言った。そして、毬が取り返せないと言って父親に訴えた。うつけ者は井戸を覗きこみ、自分の影を見て、「旦那、倅に毬を返してやっておくんははれ」と言った。

オウィディウスの『変身物語』にあるナルキッソスの物語は、水面に写った自分の姿に恋をし、叶わぬ恋(当たり前ですが)に身を焦がしやがて死んでいくお話です。鏡を見て自分の姿にうっとりする人をナルシストと言いますが、ナルキッソスが語源です。ナルシストにはちょっと愚かな人(うつけ者)というニュアンスが語源的にあるわけですね。まあ確かに、自分でかっこいいと思っている人は滑稽ですが、自分で自分の愚かさに気づいていないのですから本人は幸せなのかもしれません。羨ましいけど、絶対になりたくない、そんなところでしょうか。あはは。

水(水面、水鏡)に写る自分の姿がわからないというのは昔話の普遍的なモチーフだと言われています。皆さんご存じの、イソップの橋の上から肉を落としてしまう犬のように、古今東西この手の話は数多くあるようです。

さて、訳者はこの「井戸に落ちた毬」と全体として驚くほど似た話が『笑府』の巻11の483にあるとあって、実例を出しています。ちなみに、このように出典を明記している人は信頼できます。本物の学者です。さて、その物語は…。

子どもがチェンツを蹴って遊んでいて、たまたま井戸の中に落っ

としてしまった。そこで井戸の中をのぞきこみ、自分の姿を見て泣き出し、「ぼくに返してくれ」といっている。父に「どうしたんだ」ときかれて、「チェンツを井戸の中の子に取られたんだ」という。おやじも井戸の中をのぞきこむと、自分の影を見て、「お前さんの家の子供もチェンツを蹴りたかろうが、うちの子供だって、蹴りたくないわけじゃないんだぜ」

毬(まり)は毛に求と書きますがチェンツのチェンは毛に建、ツは子です。漢字が出ないのでカタカナにしました。毬もチェンツも小さなボールと考えていいでしょう。

『フィロゲロス…ギリシア笑話集』の成立はおそらく3世紀から5世紀の間と推測されます。ギリシアを中心に話されていた物語を集めたものです。『笑府』は中国で明の末に編纂されたのですから、おそらく17世紀。『笑府』にある物語はもっと昔から人々に愛されていたのでしょくね。いずれにしても地域も時代も違う、そして言語も違うにもかかわらず、ほぼ同じ物語が生まれていることがよくわかります。井戸、息子、父親、毬、水に写る影、これらを使って物語を完成させなさい、そんな問題を物語の神様が戯れに出してみたら古代ギリシア人と明の時代を生きた人々が同じような物語を作った、そんな空想をしてしまいます。

#### 今週のおすすめ

・島崎藤村 『藤村詩集』 (新潮文庫)

「小諸なる古城のほり 雲白く遊子悲しむ 緑なす…」は有名ですから皆さんも聞いたことがあるでしょう。美しい日本語の調べですから、意味など分からなくていいので暗唱しましょう。文章でも詩でも、読んで理解できるということと頭に入っていていつでも口をついて出てくるということとは根本的に違います。頭に入っていてこそ自分の宝となるのです。語彙を増やし表現力を磨くには美しい詩を暗唱するのが一番です。人を愛するにしても「好き」か「嫌い」しか語彙を持たないようでは動物と変わらないではないですか。情けないですよ。ところが藤村が初恋を詩にすると「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる…」となるわけです。これを文字を追うだけでなく声に出してみると目の前に可憐な少女が浮かんでくるではないですか。そんな気がしたものです、中高の頃はね。

藤村と同年代に土井晩翠がいます。「荒城の月」は知っていますね。「春高樓の花の宴 めぐる盃影さして 千代の松が枝…」と晩翠が詩を書き滝廉太郎が曲を作りました。藤村も晩翠も漱石の5歳くらい下です。森鷗外は漱石の5歳上ですが、明治の始まる前後にはどうしてこう豊かな才能が数多く生まれたのでしょうか。不思議で仕方ないのですが。正岡子規も幸田露伴も南方熊楠も皆そうです。晩翠で驚かされるのはホメロスの「イーリアス」と「オデュッセイア」を七五調の韻文で完訳していることです。超人技としか思えません。二つ合わせて二万七千行以上あるのですよ。

藤村でも晩翠でもいいので彼らの豊かな日本語に触れてください。

BGMは ビートルズの ヘルプ でした…。